いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

# 舟運・筏・川遊び 堀川のにぎわい

## 木曽から白鳥へ　木材300日の旅（上）

元和元年 (1615) に木曽が尾張藩領になると、桧など良質の木材が白鳥の御材木場へ運び込まれた。木曽の山奥で伐採した木材は、木曽川を筏流しで名古屋へ運ばれたことはよく知られている。

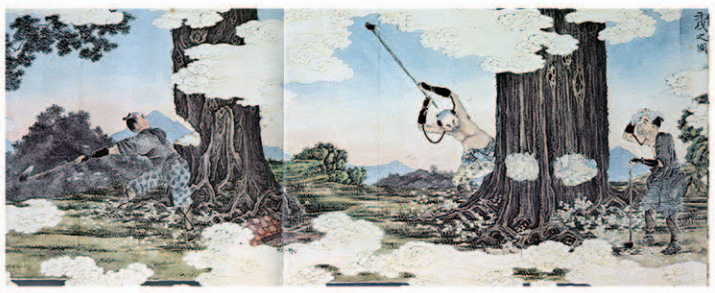
その様子を、幕末に描かれた『木曽式伐木運材図会』などによって見てみよう。

### ①　伐木計画の作成（前年の秋）

藩から上松（現：上松町）の木曽材木奉行に、翌年度に伐採する樹木の種類と数量が指示される。それに応じて、山役人はベテランの杣（そま）( 木こり）などの協力を得て、伐採する山や費用などの計画を建てる。藩に提出して了承が得られると、翌年それに基づいて伐採と輸送が行われる。

### ②　伐採と造材（5～8月）

毎年5月（旧暦）になると、上松の材木方役人が杣と日用（ひよう）（運材人夫）を引き連れて山に入る。杣は1組が２～30人、日用は1組が30人程度であった。道もない山奥に分け入り、水が得られ崖崩れなどの心配がない適地を選んで役人や杣・日用が仕事や寝泊まりする小屋を建て、伐採開始に先立って山神祭を行う。



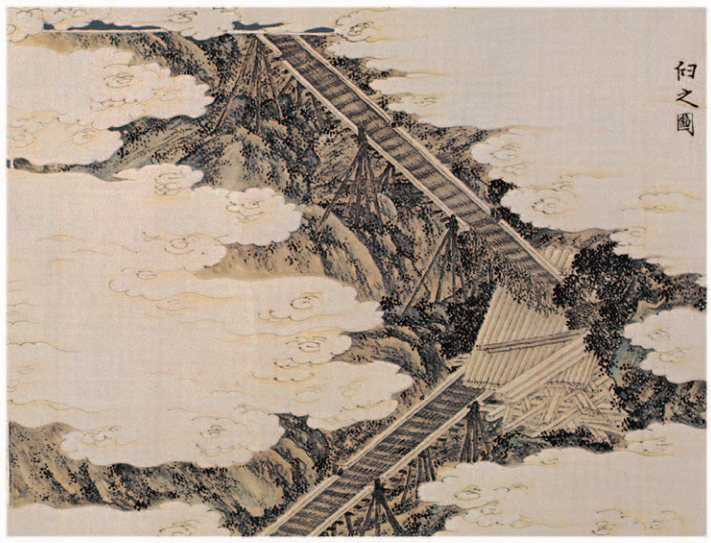
大木は中心まで達する穴を２～３個開け、最後に切り残しを断ち切る

その後、杣たちは割り当てられた地域の木を伐採してゆく。倒した木は造材と呼ばれる加工が施される。枝を払い、皮を剥ぎ、搬出できる長さに切る。切口は低い円錐形に加工するが、運搬中に岩などへぶつかった時に木が割れるのを防ぐためで、木曽の特徴であった。特注があれば、ここで角材への加工も行ったが、多くは丸太で搬出された。

### ③　山落し（5～8月）

伐採した木材を木曽川の支流まで搬出する作業である。

日用たちが、伐採した木材を使って桟手（さで）と呼ばれるスロープを造り、その上を滑り落としていった。傾斜がきつい所は摩擦の多い構造にしてスピードを落とし、緩い所は途中で止まらないように工夫するなど、場所に応じていろいろな構造の桟手を造った。大きく角度が変わる所には、臼（うす）と呼ばれる方向転換の施設を設けた。上から落ちてきた木材は、木で造られた壁に先端がぶつかるとくるっと回転して、今度は尻を先頭にして下の桟手を落ちてゆく仕掛けである。



木材を落とす桟手（スロープ）と臼（方向転換の仕掛）

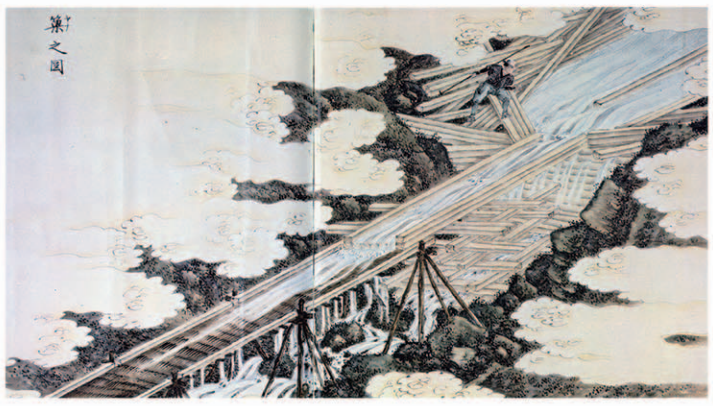
50度を超える急斜面では桟手を使えず、木材の端に穴を開けて綱を通し、吊り下げるようにして1本ずつ慎重に降ろしていった。

これらの施設は作業終了と共に順次解体していった。使用していた木材は下へと落とし、他の木材と一緒に白鳥へ送られた。

### ④　小谷狩（～11月）

山落しによって木曽川の支流に降ろされた木材を、川の流れを利用しながら木曽川合流点まで搬出する作業である。

水量が少ないところには堰を造って水位を上げて、簗（やな）と呼ぶ水路の上を水と共に流してゆく。



水量が少ない所は堰で水位を上げ、簗の上を流す

途中に滝などがあり、そのまま流すと木材が損傷する所もある。そこでは樋（とい）というスロープを造って人力で木材を引き上げて迂回し、下流部で再び川へ流している。

峻険な谷筋で大きく重い木材を搬出するためにさまざまな施設が工夫されていた。